

司令長官の孤独 (二)

山田 遼

〈2〉

連合艦隊の図上演習が開始された次の日の九月十二日、杉並区荻窪にある近衛家の私邸の荻外荘では、内閣総理大臣・公爵・近衛文磨が、内閣書記官長の富田健治を相手に話していた。

「では総理、日米交渉はこれでまったく見込みがないと、お話しになりますか」

富田書記官長が念を押すと、近衛は答えた。

「残念だが、そう告げるしかないだろう。一時は、あの人を随員に加える話もあったのだ。大変期待していたようだから、実状をありのまま伝えるしかあるまい」

宏壮たる荻外荘の和風の応接室は、残暑の季節とあって四方には簾で編んだ襖がはめこまれ、手のこんだ籐製の応接セットが置かれている。黒い大型の扇風機が二台、ゆっくりと室内の空気をかきまぜていた。

当家の主の近衛文磨は、面長の鼻下に髭を蓄え、白麻の単衣の着流しに黒い縞の羽織をつけている。長身の背筋を伸ばして、ゆつたりとソファアに座している姿は、華族の最上位、五摂家の筆頭という名流の気品がにじみ出ている。

「しかし、どうして米国はこの首脳会談に応じなかったのでしょうか。当方の意図は知り抜いている筈です。妥結の可能性は充分あったと思いますが」

淡いグレーの背広に紺のストライプのネクタイをつけた、内閣の番頭格の富田書記官長は、いまだに日米の折衝をあきらめ切れない様子だった。

「一時は向こうも乗気だったよ。会見の場所をアラスカにしようか、ハワイにしようかと言っていたんだが、イザとなるとにわかには態度が変わってしまった」

「初めから時間稼ぎだったのかも知れませんが」

「私はそうは思わない。互いの思惑が食い違ったまま、いわばボタンの掛け違いで今日に至ったと見ている。ルーズベルトにしても、決して二正面戦争は好ましくない筈だ。だから太平洋では一応妥協しておいて、対欧州に全力を傾けたい気持ちに変わりはないと思うがね」

近衛はまるで局外者のような口調で、淡々と述べている。

「では、まだ見込みがあると言われますか」

「いや、事ここに至っては、もう無理だ。すでに陸海軍の戦

争準備の歯車が、廻り始めているよ」

近衛が言い終えた時、廊下から失礼しますと声があり、紺がすりに袴をつけた書生が姿を見せた。

「只今、山本五十六閣下がお見えになりました」

「ああ、こちらへお通しなさい」

「畏まりました」

書生は引き下がると間もなく、GF（連合艦隊）司令長官の山本が姿を現わした。

淡褐色の麻の背広上下に白い開襟シャツという私服姿で、白のパナマ帽を手にしていた。頭は丸刈りで、唇を強く結んだ意志的な顔立ちである。

「お忙しいところをお越し頂き、まことに恐縮です」

立ち上がった近衛が挨拶すると、山本は軽く頭を下げ、脇の帽子掛けにパナマ帽を掛けると、無駄のない身のこなしで、近衛に向かい合った籐椅子に腰を下ろした。

「総理、私はこれで……」

富田書記官長が腰を上げようとするのを、近衛が制した。

「いや、君はこのままいて下さい」

そして山本に向かつて言った。

「内閣書記官長の富田君を、ご存知でしたかな」

「ああ、知っています。総理の補佐で随分ご多忙の様ですな」

山本は打ちとけた調子で答えた。

前号までのあらすじ

対米、英戦争の開戦が間近に迫った昭和十六年の九月十一日から二十日まで、東京、目黒の海軍大学校で、連合艦隊作戦計画の図上演習が行われた。

その際、別室では関係者だけが集合して、ひそかに真珠湾奇襲攻撃の作戦案も検討されている。

時の連合艦隊司令長官、山本五十六は、従来の海軍戦略を根底から覆すような、開戦時のハワイ攻撃を着想し、強引に実行に移そうとしていた。

その一方では、海軍戦略の総本山である軍令部や、攻撃の実施を担当する第一航空艦隊司令部は、あまりにも型破りなこの計画に対して、リスクが過大で投機的に過ぎると、反対の立場を崩していなかった。

連合艦隊参謀長の宇垣纏は、海軍部内における深刻な対立をなんとか調整しようと、さまざまに心を砕いていた。

背丈はむしろ低い方だが、がっしりした身体には海軍実戦部隊の最高責任者にふさわしい威厳が備わり、ことにその両眼には強い覇気が漲っていた。

やがて茶菓が運ばれると、近衛はさりげなく尋ねた。

「東京には、いつ来られましたか」

「昨日から目黒の海軍大学で打ち合わせが始まったので、一昨日輸送機で横須賀に着きました」

「それで、ここまではお車で……」

山本は軽くなずいて言った。

「ごく内密に逢いたいと言われるので、タクシーを乗りついで新宿へ出て、待たせておいた公用車で来ました。もちろん錨のマークのない一般ナンバーの車です」

山本は大ぶりの茶碗を手にして、気さくに語っている。

今夜、連合艦隊長官に来て貰うことになったと連絡を受け、

書記官長の富田は、夕刻からこの荻外荘で待ち受けていた。

山本の来訪は午後八時を過ぎており、ようやく総理大臣と司令長官の会談が始まったのである。

日米の外交関係は行き詰まり、まさに開戦か避戦かという緊迫した状況に直面しているが、顔前の二人は、それほどつきつめた気配を見せていなかった。

「本日本話したいのは、日米首脳交渉の件です」

近衛はやおら切り出した。山本は黙って耳を傾けている。

「局面を一挙に打開するには、この方法しかないと考えて、私はルーズベルト大統領と直接折衝するつもりでした」

言葉を切った近衛は、しばらく想いに耽る様子だったが、再び口を開いた。

「問題は二つです。ひとつは支那と仏領インド支那からの我が軍の撤退で、もうひとつは日独伊三国同盟の事実上の破棄です。どちらも陸軍が頑として承認せず、交渉が行き詰まっています。私は米大統領と話し合って、思い切った大幅な

譲歩、つまり軍の撤退も三国同盟廃棄もそのまま認めるつもりでした。そして電信でもって陛下の決断をお願いして、何としても陸軍の反対を押さえこもうと考えていました。しかし我われの努力は実を結びませんでした。今回の米側の回答で、首脳会談は中止となり、日米交渉は振り出しに戻ってしまったのです」

近衛がそう告げたあと、しばらく沈黙が続き、やがて総理の顔を直視して山本が言った。

「まことに残念です。総理におかれては、さぞご落胆のことでしょう。しかし総理、外交にはラスト・ウォードはないと言います。いかに事態が絶望的であっても、なお一抹の可能性は残しておいて頂きたいと思えます」

山本はすでに情報を把握しているらしく、さほどの動揺を見せず、むしろ近衛を慰めるような口調だった。

「たしかにおっしゃるとおりです。まだ打つ手はあります。私は決してあきらめてはいません」

近衛はそう言って、二、三度咳ばらいをして続けた。

「しかし山本さん。九月六日の御前会議では『帝国国策遂行要領』が採択されました。内容は御存知のように、十月上旬までに外交手段によって我が方の要求が通らなければ、直ちに米英蘭に対し開戦を決意するとなっています。つまり残された時間は、あと一ヶ月しかありません」

「そうです。いま現在も、戦争準備は休むことなく進行中です」

山本は当然のことのように言う。

「では、もし開戦となった場合、連合艦隊長官としての見通しはいかがですか」

近衛はやゝ身を乗り出すように尋ねた。山本はしばらく近衛の顔を見つめていたが、やがてゆつくりと語った。

「一年前に、この荻外荘で総理は私に同じ質問をされました。その時私は、日米開戦となれば一年や一年半は存分に暴れてご覧に入れる。しかしそれから先は、まったく保証出来ない」と申しましたが、今回も同じ答えをするしかありません」

山本はそこで言葉を切り、少し考えてから続けた。

「私は海軍実戦部隊の責任者です。ですから立场上、発言にはおの自ずと限界があります。そのあたりをご理解頂きたいと思えます」

しばらく沈黙が室内を支配した。

その時、富田がよろしいですかと近衛に断わってから、山本に問いかけた。

「山本長官のいまのお言葉は、短期で戦争を終結することが、必須条件だということでしょうか」

山本は富田の言葉にうなずいた。

「その通りです。日露戦争の場合は、幸い一年四ヶ月でもつ

て終結にこぎつけました。だから辛うじて勝利を捨うことが出来たのです。もし三年、四年という長期戦に持ちこまれていたら、我が方の勝ち目はありませんでした」

山本は言い切った。

「ということは、一年半で終結にもちこむ方策を、いかにして見つけ出すかですな」

富田の言葉に続けて、近衛が尋ねた。

「しかしながら、日露戦役に比較すると現状ははるかに厳しい。あの時は第三国である米国、英国の援助が大きかったし、さらに講和会議も斡旋してくれました。今回はそれがありません。結局、ドイツの戦力に期待するしかないようですね」

「いや、ドイツはまったくアテになりません。ことにその海軍力は微々たるものです」

山本はさらに言葉を続けた。

「要するに我が海軍としては、艦隊決戦を何度くり返して、敵の海上兵力を徹底的に撃滅する必要があります。そのためには、敵の来攻を待っていたのでは間に合わない。こちらから積極的に仕掛けて、あくまで押しまくることです」

山本は別に気負った様子ではなく、平静に語り続けている。「ですがそれは、海軍のお家芸である邀撃戦法とは、随分違ったあり方ですな」

富田が反論した。

「そうです。従来の対米一国の作戦計画は、まず我が方がグアム島、ウエーキ島、更にフィリッピンのルソン島を占領する。そしてそれを阻止しようと来攻する米太平洋艦隊を、マニラ群島あたりで激撃し撃破するという想定でした。それにひきかえて現状は、米、英、蘭の三ヶ国同時作戦であり、しかもスマトラ、ボルネオの油田地帯を一刻も早く手に入れねばならない。つまり前提の要件がまったく違います」

山本は説き聞かせるように続けた。

「では、日本海々戦に匹敵するような、パーフェクトな勝利を何度もくり返し、米、英の保有する艦隊をあらゆる全滅させる。もしそれが出来れば、戦争終結が可能になるというわけですか」

近衛が念を押すように言うと、山本はニヤリと笑って答えた。

「もちろん相手は、兵力量が約三倍という大敵です。尋常一様の方法では勝利はおぼつかない。ですから開戦となれば、私は飛行機にも乗り、潜水艦にも乗ります。太平洋を縦横に飛び廻って、決死の戦いくさをするつもりでいます」

そう言明しながらも、山本の言葉にはカラリとした明るさが溢れていた。

この人は事態の深刻さを誰よりもよく知っている筈だ……。山本を見つめながら富田は思った。

外交交渉が行き詰まるに伴い、陸海軍の内部では主戦論が勢力を強めていた。

石油の備蓄は日一日と減って行く。戦うなら今だ。いまならまだ勝算がある——という声が、ことに中堅の士官たちの間で大勢を占めてきたという。そしてそれを真向から押し止めようとする人物は、陸海軍の首脳部にはいない。わずかに連合艦隊の長官が、いまは戦うべきではないと主張していると聞いていたのである。

今夜、総理がひそかに山本長官を招いたのは、本人の口から開戦反対の意見を引き出し、戦争の回避に役立てたいという思惑しごつだったらしい。しかしその口からは、こちらが求めているような言葉は出てこなかった。

もちろんこの人は、閣僚の一員として軍政を担当する海軍大臣ではない。また戦略の立案に当たる軍令部総長でもない。あくまで海軍の実戦部隊の最高責任者の立場を貫き、そこからは一步も出ようとしない。とても避戦に結びつくような言げん質は得られそうになかった。

「よくわかりました」

やがて沈黙を破って近衛が言った。

「山本さんの決意と自信のほどを承って、まことに心丈夫です。なお一層のご活躍を心から期待します」

総理の挨拶でもって、この夜の会合は打ち切られた。

山本を玄関まで見送り、部屋に戻った近衛は早速、富田に語りかけた。

「なあ書記官長、あの人はやはりああ言うしか、なかったんだらうね」

「そう思います。置かれた立場としては、あれがギリギリのところでしょう」

「しかしその本心は、何とか戦争を避けたい思いで一杯なんだ。立场上可能な範囲で努力を続けているのは、こちらの耳にも入っているよ」

近衛はそう言うてから、少し居ずまいを直した。

「どうだろう。これは以前から考えていたんだが、あの人に海軍大臣をやって貰えないものだろうか」

突然の提案に、富田は驚いた。

「ということは、いまの及川わたがわ海相を更迭することになりますか」

「やむを得んだらう。及川さんはたしかに高潔な人格者だが、いまのような一国の浮沈にかかわる修羅場には不向きだよ。

もし山本さんが海相の位置につけてくれたら、戦争に向けて雪崩れこもうとしている現状を、何とか転換出来るかも知れないと思うんだが」

近衛の言い分は、富田にもよくわかった。

「たしかに総理のおっしゃる通りです。いまの大勢を押し留

めるのは、ずば抜けた政治力と暗殺をも惧れない勇猛心の持ち主でないと、とても務まりません。ですから山本提督が最も適任だと私も思います。とはいってもこのこの人事は、まことに難題ですな」

富田がそう言うて、近衛は考えこんだ。

「海軍の人事権は、海軍大臣が握っている筈だね」

近衛が問う。

「そうです。しかし将官クラスの人事は、この数年来、伏見宮の承諾がないと決まりません」

「あのお方は、軍令部総長を辞任されても、影響力はそのまま残っているのか」

「はい、総長の後任には米内よない光政みつまさ大将を推す動きがありましたが、宮様の鶴の一声で、お気に入りながのおさみの永野修身ながのむしん大将に決まりました」

「そうだったな。私も米内さんの方がふさわしいと思っただんだが」

今年の四月、八年間も軍令部総長を続けていた伏見宮博恭親王が、体調の不良で辞任し、そのあとには米内より一期上の海兵二期の永野が就任していた。

「私はね、昭和十四年当時の海軍省のことを思い出すよ」

近衛は書記官長に語りかけた。

「平沼内閣の時だった。ドイツから日独伊の三国同盟の提案

があり、陸軍は大変乗り気で各方面に働きかけていたが、海軍省が真正面から反対した。この同盟はいずれ米英との戦争につながるというんだ。海相の米内光政、次官の山本五十六、軍務局長の井上茂美、この三人の結束と連繫が実にすっかりしていた。そのうちにドイツが突然、独ソ不可侵条約を結んだので、平沼内閣は総辞職となり、同盟案も一時は立ち消えになったわけだ」

「そうでしたな。ただ海軍省の強固な反対はあの時点だけでした。翌十五年の九月には、及川海相があつさりと賛成に廻り、三國同盟は締結されています」

富田が言うのと近衛はうなずいた。

「つまり海軍も決して一枚岩じゃなかったんだ。しかしあの時の三人が、もし現在海軍の中央にいてくれたら、情勢の転換も不可能じゃないと思うんだが」

「では、いま最も望ましい人事配置といえますと」

富田は水を向けて見た。

「まず軍令部総長は、永野に替えて米内光政だ」

「ですが総理、米内大将は首相拜命の際に現役を退き、現在は予備役です」

「なあに、お上にお願ひして、現役に復帰させるよ」

「では、海軍大臣は及川を更迭して、山本大将ですな」

「もちろんだ。女房役の海軍次官は、井上茂美が一番の適役

だろう」

近衛は力をこめて言った。

「たしかにこの布陣ならば、大きな仕事ができるかも知れませんが。しかしながら戦争決意まで、残された期間は僅か一ヶ月です。とてもこれだけの異例の人事を実現する余裕はありません」

富田は冷静に指摘した。

「うーむたしかにそうだな。陸海軍の人事には、表向きは介入出来ない。水面下で根気よく根廻しするしかないんだが、この時期に衆望を一身に集めている山本長官を辞めさせるのは極めて難しい。また伏見宮を説得して、永野総長を讒にすることも、まず出来ないだろうな」

近衛は腕を組んで嘆息した。

「総理、これは伏見宮が辞任された四月に行うべき対策でした。あの頃はまだいまほど緊迫した情勢ではなく、連合艦隊長官の交替も可能だったと思います」

「君の言う通りだ。今にして思えば、私の手落ちだったよ」

近衛は率直に己の非を認めた。

「ほかに打つ手はないでしょうか」

富田が尋ねたが、近衛は首を横に振った。

「私は海軍が米英蘭の三國同時戦争には自信が持てないと、はっきり陛下に申し上げ、戦争回避の聖断を下して頂くしか、

他に方法はないと思う。しかし現状では、海軍の中央当局に一身を投げうって避戦に当たる胆力の持ち主がいけない。またお上の耳には、いつも都合の良い情報しか届かない有様だ。このままでは行きつく先は開戦しかないよ」

近衛は沈んだ調子で述べていた。

「では、戦争が始まれば、どうなると思われませんか」

富田は尋ねてみた。

「さきほど山本長官が言ったじゃないか。最初の一年位は、かなり順調に進行するだろう。だがいずれそのうちに行き詰まる。問題はそうなった時に、どう対応するかだよ」

近衛はここで言葉を切った。ややあつて富田は少し改まった口調で言った。

「総理は、現在の第三次近衛内閣が、そのまま戦時内閣に移行するとお考えでしょうか」

近衛は一瞬富田の顔を注視してから言った。

「はっきり言つて私は戦争の指導には自信が持てない。軍事に関しては、まったくの素人だからね」

「ですが、支那事変は第一次近衛内閣が成立した一ヶ月後に始まつて、現在もなお続いています」

「いやあれは宣戦布告がなされていない。あくまで事変に過ぎないよ」

近衛はこともなげに言った。

「では、一体だれが戦時宰相の大役を務めるのでしょうか」

「私は東久邇宮さんが適任だ」と思っている」

近衛は即座に答えてから続けた。

「東久邇宮さんは、陸軍大将としての経歴があり、軍の統率については十分な見識や大局観を持つておられる。陸、海両軍の対立を押さえ協調をはかる上で、最もふさわしいと思うんだがね」

「なるほど、たしかにおつしやる通りです。それで、その際における総理の役廻りは……」

富田はさらに一步踏み込んで尋ねた。

「多分私は、枢密院議長か無任所大臣の立場で、戦争の幕引きに奔走することになるだろう。日露戦争当時、大山巖大将が満州軍総司令官として出征するに当たつて、元老の伊藤博文に第一線のことは私が引き受けます。貴方は後方にあつて、適当な時期に戦争を止める、その旗ふりをせひともお願いたしますと言ひ残したそうだ。また奉天大会戦が終わつた直後に、総参謀長の児玉源太郎大将がひそかに内地へ戻つてきて、我が軍の戦力はすでに限界にきている。一刻も早く講和に持ちこんでほしいと、政官界の要路を説いて廻つたという話だ。そんな先例を踏まえて、戦争終結のための旗振り役が、私の役柄だろうと思うんだがね」

近衛は、かなり立ち入つた見解を口にしていた。

「そういえば、米内大將は海軍大臣の時、石渡蔵相から、開戦になれば勝つ見込みがあるかと尋ねられて、『勝てる見込みはありません。大体、日本海軍は、米英二国を同時に向こうに廻して戦争するようには出来ていません』とはつきり答えたとすな」

富田は少し論点をずらして述べた。

「その通りだ。それが海軍の良識派の一致した考え方だよ。ただその言葉を閣議など公式の場所で、明確に言明する人物がないんだ」

「現状はおっしゃるとおりです。しかしながら戦争が始まり、ある段階に至った場合、当然、終戦への道筋をつける必要が出てきます」

「だからそれを主導出来るのは、海軍しかない。部内のトップに、先ほど話した米内軍令部総長、山本海相、井上次官の顔ぶれが実現したら、まことに心強い限りだよ」

近衛は力をこめて言う。

「その場合、やはり中軸は山本海相でしょうか」

「そうだ。三國同盟に反対した時も、彼を中心に動いていた。大体、山本五十六という人物は、連合艦隊長官には勿体ない逸材だよ。海軍次官の時に發揮した政治手腕といい、その見識、洞察力といい、海軍部内で彼に匹敵するものはない。戦局に一応のメドがついたら、何としても中央に戻ってほし

いと思うね」

近衛は山本を、極めて高く評価していた。

「たしかに、緒戦でかなりの戦果をあげて、中央に戻り海相に就任すれば、あの人の発言力は一段と高まるでしょうな」

富田は近衛の言葉に同調したが、当面の関心はやはり今後の政局だった。

総理は開戦が近づけば、内閣を投げ出す気である。戦争の指導に自信がないというのは本音だろう。これまでもそんな気配を匂わせていたが、はつきり口にしたのは今夜が初めてだった。

しかし、その後に予定される東久邇宮内閣は果たしてどうだろうか。

陸軍大將の東久邇宮稔彦親王は当年五十四歳。陸士、陸大を終えて、大正九年フランスへ留学、仏陸軍大学を卒業して、七年後の昭和二年に帰国している。皇族の中でも軍事面の経歴が永く、自由主義的な傾向の強いことでも知られていた。もし戦争となれば、陸軍と海軍の協調が重要な課題になるだろう。陸軍参謀本部と海軍軍令部は、上下関係がなく対等の立場で大元帥を輔翼するのがタテマエだが、実状は互いに競い合っていて、政府としてもその調停に手を焼くのが屢々だった。さらに第一線での陸海協調の難しさは言うまでもない。その点、皇族で軍人の東久邇宮は、統帥の一元化の面でもま

ことに適任というべきだろう。

ただ、この件については、宮中で内大臣の木戸幸一きどこういちが反対している様子だった。

理由はよくわからないが、皇族に戦争責任を負わせるのは好ましくないということらしい。一国の存亡にかかわる非常事態に、そんな悠長な反対は通らないと思うが、木戸内府は別の思惑があるのかも知れない……。

沈黙が続いたが、やがて近衛が口を切った。

「どうだね。東久邇内閣の件だが、君はどう思うかね」

「私は賛成です。陸、海軍がそれぞれ勝手な行動をとるのを押さえるには、やはり宮様でないと無理です」

「だが、あの方は現役の陸軍大將だ。海軍はどう見るだろうか」

「海軍は伏見宮が隠退されたあとは、適当な方がいません。高松宮たかちののみやは中佐でまだ若すぎます。ですから陸海を通じて、

東久邇宮が最適任だと思えます」

「ただ、宮中はあまり乗り気じゃないらしい」

「それは私も聞いています。木戸内大臣が不賛成のようです」

「それから、問題は陸軍内部だ」

「東條陸相が反対の意向ですか」

「いや、彼は必ずしも反対ではない。むしろ部内の若手が宮様を煙たがっている様子だよ」

近衛は状況を解説していた。

「そうですね。しかし総理は木戸内府とごく親密です。ですから宮中をすっかり押さえて下されば、軍部はそれ以上反対できないでしょう。何しろ皇族に大命降下ですから。宇垣内閣が流産した時とは、わけが違いますよ」

宮田が言い切ると、近衛は大きくうなずいた。

「私も恐らくそんな形で進行するだろうと思うよ。とはいえ開戦から半年や一年は、戦況が順調であって欲しいものだ。もしもその間に大きな敗け戦があると、戦争終結の糸口がつかめなくなる」

「日清、日露の戦役では、幸いそんなつまずきはありませんでした」

「こうなると、やはり天佑神助てんゆうしんじょに頼るしかないわけだな」

平静な口調で語っているが、近衛の胸中には、気がかりな点が次々と浮かび上がって来る様子だった。

〈3〉

九月二十九日の午前十一時、九州、大隈半島の鹿屋かのや海軍航空基地におかれた第十一航空艦隊司令部では、司令長官の塚原二四はらのにしせう三中將や大西瀧治郎おおしたきたけしろう参謀長を始めとする司令部首脳が、来客の到着を待ち受けていた。

司令長官居室では、塚原長官が広いデスクを前にして、決

濟書類に目を通していた。背後の窓からは、道路を隔てて、格納庫や司令塔の立ち並ぶ飛行場が見渡される。

高く澄み切った秋の上空では、すでに飛行訓練が開始されていて、ついまいしがた数機の艦上戦闘機が、編隊で離陸して行つたばかりだった。

「長官、一航艦の方々が、只今到着されました」
軽くノックして顔を見せた副官が告げた。

「ああ、では公室の方へお通ししてくれ」

やがて腰を上げた塚原長官が、長官公室に通じるドアを開くと、中にはすでに来客たちが待ち受けていた。

白いテーブルクロスをかけた長い机の向こう側には、第一航艦司令長官南雲忠一中将、参謀長の草鹿龍之介少将、首席参謀大石保中佐、航空参謀源田実中佐の四名が席についている。

長官が入室すると、一同は一斉に立ち上がった。

塚原が中央の席に立つて軽く会釈を交わし、一同が着席すると、大西参謀長が、では始めますと塚原に声をかけて語り出した。

「只今から、当司令部と一航艦司令部の意見交換を行いたいと思います」

大西はそう断わつてから本題に入った。

「討議の主題は、GF（連合艦隊）司令部が立案したハワイ

攻撃計画であります。開戦と同時に、我が軍の空母艦載兵力を結集して、真珠湾の米太平洋艦隊を襲撃するという、これまでに研究も準備もまったくなかった一大遠征計画が、実施に移されようとしています。しかしながらその実行に当たっては、多大の困難と危険を伴うと担当の一航艦隊司令部が強く危惧しておられ、また当方としましても、開戦時のルソン島の米軍基地に対する航空撃滅戦には、空母兵力の協力の必要を痛感しているところがあります。よつてこのハワイ遠征計画を、虚心に再検討したらどうかと考え、本日この席を設営しました。どうか忌憚のないご意見を述べて頂きたく願います次第です」

大西は快活な口調で一気に述べ立てた。

一航艦の草鹿と参謀長同士で、充分に根廻ししたんだな……と塚原は思った。

極めて長い航統距離をもつ零式艦上戦闘機が配備されているので、台湾南部からルソン島へ往復する航空攻撃は、なんとかメドがついている。しかし天候の問題や敵地上空での滞空時間を考えると、まさにギリギリ一杯の有様だった。なんとか正規空母を二隻、こちらへ廻してほしいという十一航艦の切実な願いは、今もまったく変わっていないかった。

だから大西が、一航艦と手を組んでハワイ攻撃案を阻止したいと持ちかけた時、塚原はそれを承諾したのである。

本来ならば、基地航空部隊の十一航艦が口を出す立場でないことは、重々承知だし、空母部隊の一航艦とこんな相談をするのが、スジ違いなのもよくわかっている。

だがルソン島の米軍の航空戦力は、現在でも、日々増強されつつあった。もしこれを撃ち洩らしてもしたら、我が軍のフリリッピン攻略作戦が根本的に崩壊してしまう。たとえ一番技倆の低い五航戦の空母二隻でも結構だ。とにかく艦載機一五〇機の援助があれば、どれほど戦いやすいことか……。それは十一航艦司令部全員の共通した想いであった。

塚原の正面には、兵学校も海軍大学も同期の一航艦司令長官の南雲中将のいかつい顔がある。

太い眉の間には二本の深い縦皺が刻みこまれ、唇を一字に結んだ彼は、水雷戦術では海軍切つての権威だった。ことに夜間戦闘においては、駆逐艦隊を率いて敵主力部隊へ果敢な魚雷攻撃をかける猛将タイプとして知られていた。

だが今は、未経験な航空作戦を指揮する第一航空艦隊の長官に納まっている。そのためなのか、あるいは年齢のせいか、対面した南雲にはあまり覇気が感じられず、どこか生彩を欠いた印象だった。

大西の言葉を受けて、何か一言喋るのかと思ったが、南雲は目を閉じたまま沈黙している。一呼吸あって、隣に座った草鹿参謀長が口を開いた。

「ハワイ攻撃計画については、さる九月十六日と十七日、海軍大学校において研究会が開かれたのはご存知の通りです。さらに一週間後の九月二十四日、軍令部作戦室で軍令部とGF司令部、一航艦司令部の三者会談が行われました」

草鹿はこれまでの経過説明を始めた。

「当日は軍令部からは福留作戦部長を始め、第一課の参謀全員、GF司令部は宇垣参謀長と黒島、佐々木両参謀、当司令部からは私と大石、源田参謀が出席し詳細な打ち合わせを行ったのであります」

草鹿はよく響く声で流暢に述べている。

相変わらず大柄で堂々たる押し出しだった。兵学校は四十期で、元来は砲術が専門だが海軍大学を卒業してから航空に転じ、この分野では草分けの一人に数えられていた。

「二十四日の軍令部における会合は、はっきり言って結論は出ませんでした。GF司令部は空母戦力をすべて投入して、この作戦を強行する姿勢を変えておりません。これに対し軍令部と我が一航艦は、あくまで慎重論を唱え、結局、もの別れに終わったのであります」

草鹿は無刀流の剣法に通じ、また禅の造詣も深い、いわゆる精神家として知られ、自分の主張を貫く押し強さは無類だった。

「しかしながらその後の情報では、軍令部にはやや軟化の傾

向が生じた模様です。つまりG F司令部の要求を一部受け入れ、第一戦隊と第二戦隊の空母四隻でハワイを攻撃させ、新設の第五戦隊の二隻の空母は、南方作戦に振り向けるという妥協案を検討している様子です」

草鹿は別に気負っているわけではないが、その風貌や語調には充分な威圧がこもっていた。

「私はこの軍司令部の方針は誤っていると考えます。こういう中途半端な態度は許せない。用兵には妥協は絶対に禁物です。この際ハワイ攻撃はすっぱりとあきらめ、全力を傾けて南方の攻略に当たるべきです」

草鹿は強い口調で断言した。

——なるほど、これが南雲司令部の本音だ。長官の肚はらの中を参謀長が代弁しているが、こんな非公式な会合では、南雲も口を出し辛いだろうな——と塚原は思った。

南雲長官はハワイ攻撃をしづつています。ですから一航艦と組んで、反対運動をやりたいと思えますと大西が持ちこんできた時、塚原はよかろうと承諾したのだが、内心では、たとえ妥協案であっても、空母二隻がこちらへ転用されれば、それで充分だったのである。

だが、南雲の立場は違う。あいつは我が方の一部分の兵力だけで、米太平洋艦隊の全勢力と戦うことに、どうしても納得出来ない様子だった。

まあ無理もない話だ。何しろこんな桁はずれな作戦案は、我が海軍の創設以来、真剣に取り上げられたこと二度もない。日露戦争以来、敵の来攻を待ちうけ、出来るだけ有利な状況でこれを迎え討つのが、海軍の基本戦略だった。それが突然、遠く三三〇〇哩彼方の敵の根拠地に先制攻撃をかけると命令されたら、だれしも二の足を踏むに違いない。しかも率いる艦隊は、手馴れた水雷部隊ではなく、まったく専門外の空母集団である。たしかにこれは同情に値する局面ではあった。

「只今の草鹿参謀長のご意見は、まことにものともだと考えます」

大西が草鹿の発言を引き取って語り始めた。

「このハワイ攻撃案は、本年の一月頃、山本長官が発案されたものです。それから約九ヶ月、鋭意検討が重ねられました。が、現状なお研究も準備も不十分な有様です。しかも本件は奇襲を前提として計画されていますが、実際は、事前に発見され強襲となる確率が高いと見るべきです。図上演習の想定では、攻撃前日の夕刻、敵の哨戒機に発見されるが、無電の発信前にこれを撃墜、翌日朝、艦載機の全力でもって、真珠湾在泊の敵艦隊を襲撃して、多大の戦果を挙げるとなっております。

しかしながら、こんなことはまずあり得ない。敵の哨戒機を早期に発見し、通報前に撃墜するのは極めて困難です。当

然、我が方の全容が明らかになります。翌朝空襲されるのがわかっていて、湾内に停泊している筈はなく、敵艦隊はすべっておつ取り刀で出撃してくるでしょう。

そうなれば敵の航空戦力は、オアフ島基地の陸上機や飛行艇が約五〇〇機、三隻の空母の艦載機が約二五〇機、併せて約七五〇機です。一方敵の艦艇は、空母三隻の他に戦艦八隻、重巡洋艦十四隻、軽巡洋艦五隻、駆逐艦四〇隻余りという、我が連合艦隊の総力に匹敵する巨大な戦力です。これを相手に史上空前の一大機動戦闘を展開しなければなりません。果たしてその手当てが出来ているのかと尋ねましたが、草鹿参謀長はそれどころじゃない、奇襲攻撃の準備だけで手が一杯だということでした。この一事をもつてしても、本計画の実行は到底無理だといわざるを得ないのであります」

大西は相変わらず明快な語り口で説明し終えた。

連合艦隊の内部では、立案したG F司令部と実施に当たる第一航空艦隊の間に、大きな溝が生じているのだが、大西にかかるとそんな深刻さはどこかへ消え失せ、ごくありふれた作戦案の検討にしか思えないのだった。

しばらくの間、沈黙が室内を支配した。

正面の南雲忠一長官は、やはり瞑目して固く口を閉ざしたまま、一言も発していない。

塚原から見れば、一航艦長官とはいうものの、航空に関し

てはまず素人に近い。この半年の間にいろいろと教えこまれたにしても、まだ充分に消化して応用出来る段階ではあるまい。エキスパートの部下の進言を、そのまま鵜呑みにするのが実状だろうと思われた。

平時であれば、一年か二年間辛抱すれば次の職席が待っている。ところが廻り合わせというべきか、およそ自信のない航空作戦の指揮を任せられ、しかも予想もなかったハワイ遠征の実施を命じられているのである。正直なところ、とてもやれそうにない、誰かに替わって貰いたいというのが本心だろうな——と塚原は見ている。

いざという時には、部下の意見が真二つに割れることもあるだろう。進むべきか退くべきか。咄嗟の決断に全艦隊の命運がかかるような場面に遭遇した時、果たして的確な判断が下せるだろうか。

これが水雷戦隊を率いているのであれば問題はないだろう。あらゆる状況や展開が頭に刻みこまれている。迷うことなく突入出来るに違いない。ところがこの航空作戦となると話が違ふ。何と判断していいかわからず、結局は部下の意見にふり廻されるのがオチだろう……。

そんな想いが頭をよぎるが、相変わらず南雲は口を開こうとしない。とうとう塚原は口を切った。

「只今の草鹿、大西両参謀長の意見はまことにもつともだと

思います。我が海軍の基本戦略は日本海々戦以来、一貫して来攻する敵を迎え討つ邀撃戦法にしぼられてきました。ところが山本長官は、まさに正反対の長駆ハワイの真珠湾を遠征攻撃するという、積極的戦法を採用されたのであります。しかしながら、これまで永年の間積み重ねてきた戦備や訓練を一挙に転換出来るものではない。従って山本長官の発想は、理論としてはまことに卓抜ではあるが、実行に移すのは極めて困難であり、リスクも大きいと考えるものです」

塚原が言葉を切ると、正対した南雲長官が目を見開き、二、三度大きくうなずいた。しかしそれでも言葉を発しようとはしない。

その時、南雲の一人おいて隣の源田航空参謀が発言した。

「ひと言、よろしいでしょうか」

源田は南雲がうなずくのを確かめて、塚原に向き直った。

「いまほど塚原長官は、G F司令部のハワイ攻撃案は、リスクが大き過ぎ、その実行が危ぶまれると言われました」

源田美中佐は、塚原をヒタと見すえて言った。小柄だが猛禽のように鋭い眼差しは、戦闘機の名パイロットとして知られている。

「その通りだ」

塚原が肯定すると、源田は歯切れのいい口調で続けた。

「たしかにこの計画は、従来の海軍戦略から大きくはずれて

おり、まさに前人未踏の領域にあることは間違いありません」

源田はここで言葉を止めて、塚原と大西の双方を見較べた。六隻の大型空母を結集して編成された第一航空艦隊の主力は、もちろん空母に搭載された各種の艦載機集団である。

戦闘機は、大陸戦線での能力を充分実証してみせた、零式艦上戦闘機であり、急降下爆撃の担当が九九式艦上爆撃機。魚雷攻撃と水平爆撃は九七式艦上攻撃機が受け持っていた。

この空母六隻が搭載する四〇〇機近い飛行集団を、いかに練成し、いかに実戦で運用するかが、この源田中佐と同期で飛行総隊長の淵田美津雄中佐の二人に任されていたのである。

「うむ、では源田参謀の意見を聞かせて貰おう。現場には、現場の見方がある筈だ」

塚原は言いながら南雲の方へ目をやったが、相変わらず瞑目したままで反応はない。

「塚原長官はよくご存知だと思いますが、現在、第一航艦に配備されている艦載機の性能は、米英軍の第一線機と比較して、同等あるいはそれ以上の能力を有しております。また飛行搭乗員の技倆は、猛訓練の甲斐があつて、このところ著しい向上を認めております。ただ欠点は、機数、人員共に層が薄く、大きな消耗があれば、その補充が極めて困難な点にあります。つまり居合い抜きと同じで、抜き討ちの一太刀に賭けざるを得ないのが現状と言えます」

源田の言わんとするところは、塚原にはよくわかっていて、ことに零式艦戦の性能はすば抜けていて、熟練したパイロットが操縦すれば、一機で米軍機の二機や三機に対抗出来ると予想されていた。ただその機数や乗員数の常に不足がちなのが、悩みの種であった。

「山本長官が、空母の南方転用をしぶっておられるのは、最も効果的な用法を重視されるからだな」

塚原の問いに源田は答えた。

「その通りです。南方作戦で敵の陸上機を相手に、母艦の艦載機をすり潰してしまい、いざ艦隊決戦という時に、その威力が発揮出来ないようではまずいわけです」

その時、大西參謀長が発言した。

「このたびの山本長官の構想は、まことにつきつめた上での結論というべきでしょう。しかしこれを実現させるとなると、まさに至難の業です。これまでの一航艦の慎重論は、それを如実に物語っております」

たしかに大西の言う通りだった。

永年、手塩にかけてきた激撃戦略を、根本的に覆すような破天荒な計画を、よりもよって南雲のヤツにやらせようというのが、そもそも無理な話だ。ではだれが適任かとなれば、まず浮かぶのは小沢治三郎だが、彼は南雲の一期下で、また中將に昇進したばかりだ。多分人事局は承認しないだろう。

ましてその三期下の山口多聞や大西となると問題外だ。

もしも南雲があくまで尻ごみして更迭となれば、そのあとを引き継ぐのは、この自分ではないかと塚原は思った。

航空関係の経歴は永い。航空廠の総務部長を皮切りに、空母赤城の艦長、第一、第二の連合航空隊の司令官も務めていた。だから現在、こうして基地航空隊の第十一航艦の指揮に当たっているのである。もし十四年十月に、飛行機事故で重傷を受け、療養生活を送っていなければ、今頃は南雲ではなく、自分が第一航空艦隊を率いる立場だったかも知れない。かりに自分に、空母六隻と四〇〇機の艦載機群が与えられたならば――。決して二の足を踏んだりはしない。まさに千載一遇の好機であり、男子の本懐これに過ぐるはなしだ。

どうせ奇襲が成立する筈はない。

開戦直前ともなれば、米軍の警戒は強化され、ハワイ全域には嚴重な哨戒、索敵の網がかけられるに違いない。凶上演習のように、攻撃前日の夕刻ではなく、もっと早く午前中にも発見されるかも知れない。そうなれば、敵艦隊は総力を挙げて出撃し迎え討とうとするだろう。当然、ハワイ北方海上において、一大海空戦が開始されることになる。

だが麾下の艦載機集団の戦力は抜群だ。

第十一航艦のパイロットの腕も、随分上達して来たが、第一航艦の錬度は更に上で、いわば名人芸だった。急降下は走

行中の敵艦の煙突の中に爆弾をほうり込めると言うし、雷撃は水深十二メートルでも可能だと自負しているらしい。

援護に当たるのは、高速戦艦二隻、重巡洋艦二隻、軽巡洋艦一隻、駆逐艦九隻、潜水艦三隻で、これらは最新鋭または改装直後のものばかり、全艦艇すべて最高時速三〇ノット以上の高速機動部隊だった。

この帝国海軍選り抜きの精鋭をもつて、臨機応変の機動戦を展開すれば、必ず勝機が巡ってくるかと塚原は確信していたのである。

「では、そろそろ一応の結論を出したいと思います」

やがて草鹿参謀長が切り出した。

「開戦劈頭のハワイ奇襲攻撃案は、多大の困難を伴い、またリスクも大に過ぎます。よってこの計画は、即刻中止すべきであります。大西参謀長と私が、直接G F司令部へ赴き、山本長官の翻意をお願いしたいと考えますが、いかがでしょうか」

草鹿は、当然のことのように言い切った。これまで沈黙していた南雲長官は、ようやく目を開き、大きくうなずいた。

とにかくこの件は南雲には無理だ。中止するか、さもなければ指揮官を変更すべきだと考えて塚原は答えた。

「よろしい。ではそのように取り計らってくれ給え」

草鹿と顔を見合わせて、大西が告げた。

「早急にG F司令部へ出向き、山本長官に申し入れます」

「もし、承諾が得られない場合は……」

塚原の危惧に大西は応じた。

「いや、我れわれ二人が精魂を傾けて訴えたならば、必ずわかつて頂ける筈です」

山本がこの計画を着想した時、まず最初に大西の意見を求めたとされている。それだけに、彼の言葉には、充分な自信がこめられていた。

〈4〉

昭和十六年十月三日、山口県の室積沖に連合艦隊の旗艦である戦艦・陸奥が停泊していた。

G F司令部は、これまで同型艦の長門におかれていたが、長門が修理入渠のため、臨時に陸奥に移っていたのである。陸奥の作戦室には、連合艦隊参謀長の宇垣纏少将、首席参謀の黒島亀人大佐、航空参謀の佐々木彰、中佐の三名が集まっていた。

部屋の中央の会議用テーブルには、舷窓側に椅子が四脚並べられ、宇垣と黒島の間は空席になっている。廊下側の椅子は二脚だった。

「到着は十時半の予定だから、間もなくやってくるだろう」宇垣が壁面の時計に目をやりながら言った。

「来艦の目的は、やはりハワイ攻撃案に対する反対表明ですね」

佐々木中佐が尋ねた。

「そうらしいな。つまり長官の意図を、参謀長が代弁するということ形だ」

宇垣が言うと佐々木が反論した。

「しかし参謀長。一航艦は初めから腰が引けていて、中止したがっているのはわかりますが、十一航艦がなぜ、その肩を持つのでしょうか」

佐々木の言う通り、このハワイ攻撃計画は、フィリッピンの米軍を担当する第十一航空艦隊が関与する問題ではなかった。

「もちろんこれは、正規の命令系統とは別個のものだ。あくまで草鹿と大西の個人的な意見具申に過ぎない」

宇垣が答えると、黙って聞いていた黒島大佐が口を開いた。

「しかしこうまで反対するとなると、放つてはおけません。やはり南雲さんは、交替して貰った方が良いのではないですか」

禿げ上がり頬骨の高い容貌のこの首席（先任）参謀は、山本長官の指名で、昭和十四年の十月からすでに二年間、この職についている。

山本の信頼は極めて厚く、従来の戦略から大きく逸脱した、

奇想天外ともいうべきハワイ遠征計画の作成に、中心人物として腕をふるっていた。

「たしかにそうだ。現状では最大のネックが、実施部隊の司令長官だ。本来ならば、俺にまかせると勇躍して出撃する筈のものが、いまだに尻ごみしているのだからな。とはいうものの、これを更迭するとなるとまた問題だ。何しろ軍令部あたりでは、この作戦は投機的だの大バクチだのと批判がくすぶっている。だからいま、長官の首をすげ替えようとするれば、計画そのものが潰されかねない有様だ」

宇垣は説得するような調子で述べていた。

「開戦間近だから大幅な人事異動は出来ない。そのあたりを見越して行動しているのでしょうか」

佐々木が言うと宇垣はうなずいた。

「まあそうだな。大西も草鹿も海軍の航空関係では重鎮だからな。その二人が揃つての上申となれば、ウチの長官も無視は出来まいと踏んでいるのだろう」

宇垣の言葉が終わると同時に、廊下側のドアが開き、副官の福崎中佐が顔を見せた。

「大西参謀長と草鹿参謀長が見えました」

そう告げた福崎が、どうぞと声をかけると、大西と草鹿の二人が作戦室へ入ってきた。

「やあ」、「やあ」と軽く会釈しながら、二人はやや緊張した

面持ちで、テーブルの向こう側に着席した。

ほとんど間をおかずに、作戦室の艦首側のドアが開き、司令長官の山本五十六が姿を現わした。

一同が起立して迎える中、足早に中央の席についた山本は、まあ掛け給へと声をかけ、着席が終わると気さくな調子で言った。

「今日は折り入って話したいということだが、まず聞こうじゃないか」

丸刈りの頭には白いものが混じっているが、ネイビー・ブルーの軍装の全身には、精気が満ちていた。五十八歳という年齢よりは、はるかに若い身のこなしである。

視線を向けられた草鹿が口を開いた。

「本日ここに参ったのは、ハワイ攻撃計画の件であります」

草鹿は山本を直視して、ゆっくりとした口調で語り出した。

「わが第一航空艦隊司令部におきましては、この過去に前例のない計画案に対し、鋭意、研究、検討を重ねました。その結果、当案は不確定要素があまりにも大きく、失敗に終わる可能性が高いという結論に達しました。よってこの計画は、中止撤回が妥当と考え、ここに上申する次第です」

草鹿はズバリと結論を述べた。音吐朗々たるその発言は、確信に満ちている。

山本はしかし、一向に動ずる気配はなく、隣の大西へ声を

かけた。

「うむ、では、大西君の意見を聞こうじゃないか」

大西は一瞬考えこんだ様子だったが、やがて語り始めた。

「第十一航艦としましては、開戦に際してまず南方要地の攻略、ことにスマトラ、ボルネオの石油資源の確保が、緊急の課題と考えます。従ってハワイ攻撃案は兵力の分散をまねき、南方攻略に支障を来たす惧れがあり、一兔を追うの愚は、極力避けるべきと考えるものです」

大西の言葉には、草鹿ほどの確信はこもっていない。

つまり当事者の一航艦と異なり、十一航艦は空母戦力の一部を廻してくれば良いという立場だから……。両者の発言を聞きながら、参謀長の宇垣は思った。

「うむ、わかった。まあタテマエとしては、そういうことだろう。だが、君たちは航空戦力の用兵にかけては、部内有数のヴェテランだ。せつかくの機会だから、もう少し立ち入った本音を聞かせてほしいものだな」

山本は、まるで気のおけない同士で討論しているような語調だった。その顔面には、おだやかな微笑さえ浮かべているが、反面、双方の眸は激しい光を宿していた。

「では、長官の方から具体的にお聞きになって下さい」

勢いこんで乗りこんだ出鼻を挫かれたように、大西が言う。「そうだな。いま草鹿君が、不確定要素が大きいと言ったが、

何が一番問題だと思っかね」

尋ねられて草鹿が言った。

「北方航路の気象や燃料補給の件もありますが、私は最大の問題は、奇襲が成立するかどうかだと思います」

「それで、君の考えは」

「九月十六日の図上演習では、前日午後には、敵哨戒機に発見される可能性大と想定されています。もしそうならば、奇襲は成立しません。夜間のうちに敵艦隊は出動し、洋上の遭遇戦になります。一方、敵の北方海域哨戒が実施されていなければ、開戦当日早朝の奇襲攻撃が成り立ちます」

「それで、どちらの可能性が高いと見るかね」

「開戦間近となれば、索敵や哨戒は嚴重になる筈です。相手はよほどの愚か者でない限り、常識的には当然、強襲になると見るべきです」

草鹿の言葉は、次第に活気を帯びてきた。

「であれば、ハワイ北方海域での機動戦を前提にして計画立案することだよ。もちろん表向きはあくまで奇襲だ。でないと軍令部が採用しないからな」

山本はこともなげに言い切った。

暫くの沈黙があり、やがて大西が口を開いた。

「私もやはり、そのあたりが問題だと思います。軍令部の指示は、奇襲による一撃離脱です。もしこれが成立するという

保証があれば、何も心配する必要がありません。ところが、現実には概然性の高いのは、敵がてぐすねひいて待ち受けるところへ、頭からとびこんで行く形です。このように計画と実行とのギャップが極めて大きいのが、本計画の根本的な欠陥というべきです」

大西の発言にも熱がこもっていた。続いて草鹿も言葉を継いだ。

「大西参謀長の言う通りです。最初から開戦劈頭の洋上決戦を企図するのであれば、北方航路の隠密行動など無意味です。むしろ戦艦部隊や水雷戦隊も含め、連合艦隊の全力でもって、ハワイへ向けて押し出すのが正道ではないでしょうか」

草鹿は力をこめて言った。

これではいわば堂々めぐりだと宇垣は思う。奇襲というのは、この作戦を承認させるための口実であることは、一航艦も百も承知の筈だ。だから現実には生起するハワイ沖海空戦の指揮は、とても自信が持てない。誰か適任者に替えてほしいとはつきり言えはいんだ――。

その時、黒島首席参謀が発言を求めた。

「本作戦が前例のない、いわば異端の計画であることは確かです。しかしながら、それがまた当方のツケ目でもあるわけです。言葉を変えれば、相手側にとって予想もなかった状況が突如として発生することになります」

重い、むしろ訥々とした語調で黒島は述べている。大西と草鹿は黙って耳を傾けていた。

「もちろん敵側にも、それなりの警戒態勢はあります。ですから完全無欠な奇襲は、まず望めないでしょう。とはいえ、我が空母機動部隊の出現は、やはり想像を絶した事態です。何の準備も心構えもなく真珠湾を出撃しても、充分な対応は出来ません。いわば、かつての桶狭間の合戦や、ひよどり越えの戦のような戦況が展開されると推測されます」

黒島は講義でもするような調子で、淡々と述べた。

「たしかに首席参謀の言い分には一理がある。だがそれは、希望的観測というものだろう」

ひと呼吸おいて草鹿が反論して、さらに続けた。

「攻撃前日の被発見ではなく、もっと早い時期に、例えば北方航路で他国船に行き合い、我が方の全貌が暴露される場合もある。また、悪天候で燃料補給が遅れ、開戦日に間に合わない状況もあるだろう。そういったさまざまな要因も考慮する必要がある」

草鹿はそれから山本に向き直って言った。

「とにかくこの作戦案は、投機的に過ぎます。虎の子の正規空母のすべてを僥倖にゆだねるのは、何としても避けるべきだと考えます」

草鹿がそこまで言うと、山本は遮った。

「ちよつと待て、僕がいくらブリッジやポーカーが好きだからと言って、そう投機的、投機的と言わないでほしいな」

笑みを含み、軽いなすように言って、山本はあとを続けた。

「君たちは、まず南方作戦というが、南方へ向けて出払っている時、米艦隊が我が本土を襲撃したらどうなる。南が落ちつくまで、相手が手をつかねて待つてくれるという保証があるのかね」

穏やかに論ずるように述べてから、山本は態度を改めた。

「このハワイ攻撃案が常道ではない、いわば詭道だという批判はよくわかる。しかしながら、いま我々の直面している米、英、蘭三国同時戦争は、これまでまったく想定されていない。だから従来策定されていた作戦計画は、もはや通用しない。正々堂々の常法を捨てて、あえて奇策を選ばざるを得ない由縁が、ここにあるんだ」

決して大声ではないが、山本の言葉は厳然たる気迫を帯びている。一言ずつ噛みしめるように告げるその声は、ずしりと各自の肺腑に響き渡った。

「この戦争は、長期戦になったら絶対に勝ち目はない。軍令部あたりは、南方資源地帯を確保して、長期不敗の態勢を築くなどと言っているが、とんでもない話だ。常に先手を取って主導権を握り、短期決戦に徹する以外に方法はない。だか

ら僕は、このハワイ攻撃に海軍の命運を託したんだ。僕が連合艦隊司令長官である限りは、絶対に実現させる決心でいる。どうか君たちは、この信念に沿って尽力して貰いたい」

山本長官の言葉には、磐石の重さがこもっていた。

「よくわかりました。私は全面的に協力致します。なあ草鹿、お前もそうだろう」

大西がまず山本の言葉を受け入れ、隣の草鹿に同調を求めたが、こちらはまだ慎重だった。

「長官のおっしゃることは、よく理解出来ます。戻ったら南雲長官にありのまま伝えたいと思います」

「ああ、よく説得してくれ給え」

山本もそれ以上は追求せず、これでもって異例の会合は幕を閉じた。

作戦室を辞去した大西と草鹿は、タラップを登り上甲板へ出た。この時期、まだ「大和」^{やまと}、「武蔵」^{むさし}は完成していない。

この陸奥と長門が、日本海軍最大の戦艦である。数次の改装で四万トンに近い排水量を有し、四〇センチ主砲八門を備えた巨艦は、秋の日差しを浴びて瀬戸内海の周防灘^{すおうの灘}に悠然と停泊していた。

下の海面に内火艇が待機する舷門まで到達した時だった。

福崎副官が走りよってきて声をかけた。

「少々お待ちください。只今、山本長官がお見えになります」

司令長官が舷門まで見送るといふのは、異例のことだが、間もなく山本が宇垣を伴って現われ、草鹿に向かって声をかけた。

「草鹿君、先ほども言った通り、ハワイ攻撃は僕の固い信念だ。これからは反対論を唱えずに、どうか僕の信念の実現のために協力してくれ給え。作戦実施のために君の要望することは、何でも実行させるよう努力するつもりだ」

山本の言葉には、先ほどのような厳しさは見られない。その代わりに、率直な真情がおもてに溢れ出ていた。ここに至っては、さすがの草鹿も承諾せざるを得なかった。

「わかりました。今後は決して反対致しません。必ず長官のお考えの実現に努めます」

姿勢を正し、山本を直視して草鹿は答えた。

——やはりウチの長官は情の人だ——、傍らにあつて宇垣は思った。そして相手の心をしつかり把えてしまう山本の独特な人間の魅力に、改めて感じ入っていた。

大西と草鹿を見送り、宇垣が作戦室へ戻ると、黒島と佐々木の二人が何か熱心に話しこんでいた。

「参謀長、見送りはいかがでしたか」

佐々木が振り向いて尋ねた。

「ああ、長官が舷門まで出向かれて、草鹿参謀長に再度、協

力を依頼された」

「それで……」

「さすがの草鹿も折れて『もう反対はしません、長官のお考への表現に努めます』と答えたよ」

「そうですか。よかったですな」

黒島と佐々木は、ホツとした様子だった。

臨戦態勢が着々と進行するに伴い、GF司令部は目の廻るような忙しさだった。しかしこのハワイ攻撃計画は、外部には厳重に秘匿されているので、計画の具体化に関しては、黒島と佐々木がかかり切っている。その一方では、参謀長の宇垣は、いわば疎外されたような形が続いていたのである。

ちようどいい機会だ。戦策の進行状況を聞き出して見ようと考え、宇垣は空いた椅子に腰を下ろして、黒島に声をかけた。

「先ほど長官が言われたが、軍令部の立場は、相変わらず奇襲による一撃離脱なのかね」

黒島は少し考えてから、ゆっくりと答えた。

「そうです。軍令部は一貫して、ハワイ攻撃計画を、南方攻略の支援作戦と位置づけています。南方資源地帯の大部分、つまりフィリピン、マレー、スマトラ、ジャワ、ボルネオなどを占拠するには、四、五ヶ月はかかる。だから少なくとも半年間は、米太平洋艦隊の行動を制限しておきたいわけ

す」

「つまり本格的な艦隊決戦は、南方攻略が終わってからです、それまでの時間稼ぎということだな」

「そういうことです。そのためにも空母戦力は極力温存したい。あくまで奇襲に徹して、一撃だけで引き揚げてほしい。空母は一隻も失ってはいけない。一定期間、米国艦隊の活動を制約すれば、それで充分だ……。まあ、このあたりが、軍令部の本音でしょうな」

黒島はほとんど感情を変えず、平坦な口調で語り続けた。山本長官の絶大な信頼を受け、連合艦隊の作戦の立案策定は、ほとんど彼の独創的な頭脳で組み立てられているとされていた。だから本人も、自分を日露戦争時の名参謀 あきやまねゆき 秋山真之中佐になぞらえている様子だった。

彼の言動には、かなり風変わりな面があり、作戦の構想にとりつかれると、舷窓を閉じた私室にこもり、素裸になって昼も夜もぶっ通しで仕事を続けるとか。担当の従兵たちが、先任参謀ではなく、仙人参謀あるいは変人参謀と呼んでいるなどと噂をされていた。

「しかし草鹿はともかく、大西のやつが反対論の肩を持つとは、意外だったな」

宇垣が言うと、佐々木が引き取った。

「参謀長はご存知でしょうが、軍令部は妥協案として、第五

戦隊の瑞鶴、翔鶴の二空母を南方作戦へ廻すつものよう
です。大西参謀長とすれば、それで足りる筈ですが、本日の
件は、個人的に意気に感じてのことではないでしょうか」
「それもあるだろう。しかしわしには十一航艦の塚原長官の
考えを、代弁しているように思える」

宇垣は言った。

「塚原長官も南雲長官に同調されているわけですか」

「いや南雲さんとは立場が違う。基地航空の運用にかけては、
あの人は部内の重鎮だ。それだけにハワイ攻撃については、
別の観点がある筈だ」

宇垣の言葉に対して、今度は黒島が尋ねた。

「では、塚原長官が作戦に反対される理由は、どこにあるの
でしょう」

黒島の口調には、かなり強いものが含まれている。宇垣は
少々考えてから口を切った。

「結局、南雲さんが不適任であることが最大の理由だな。平
時ならそれでもいいんだ。年功序列で配置を決めて、何等支
障はない。だが今は違う。一航艦の長官をだれがやるかに、
わが国の命運がかかっているととっても過言ではない」

「では……」

「そうだ。南雲さんがあくまで反対して、もし更迭となれば、
あとは自分が引き受けようという含みだったのじゃないか

な」

「しかしそうだったら、十一航艦の後任には、だれを当てま
すか。現状では、あの人が最適任です」

「たしかにそうだ。だが南雲さんと塚原さんは同期生で、中
将に昇進したのも同時だった。交替があつても、おかしくは
あるまい」

宇垣の言葉に、黒島はゆつくりと首を振った。

「言われるように大飛行集団の扱いにかけては、塚原長官は
得がたい人材です。ですがその反面、艦隊司令官の経験はほ
んどありません。海上勤務は赤城艦長くらいのもので、あ
とはほとんど陸上勤務です。まず人事局は納得しないと思
います」

「なに、艦隊行動の指揮は、参謀長か航海参謀に任せておけ
ば済むことだ」

宇垣は反論したが、それが無理な人事であることは、よく
わかっていた。

「だが及川海相では、そんな型やぶりのな人事は無理だな」

宇垣が言うと、黒島も続けた。

「日露戦役では、開戦前に山本権兵衛海相が、GF長官の入
れ替えなど、思い切った人事を行っています。しかしながら
現在は、そんな大鉦をふるう人物はいません」

黒島の言う通りだった。もしウチの長官が、海軍大臣だつ

たらという想いが、一瞬、宇垣の胸をよぎった。

「それでは、例の軍令部の妥協案だが」

宇垣は話題を元へ戻した。

「一航戦と二航戦の空母四隻でハワイを、残りの五航戦の二隻は、南方へ転用するというのを、ウチの長官は納得されているのかね」

二人は顔を見合わせたが、すぐに黒島が答えた。

「長官は、あくまで六隻の正規空母をすべて投入して、ハワイ攻撃を実行するお考えです」

黒島はまことに明確に言い切った。

「では、軍令部との折衝は」

「私が出向いて、交渉に当たります」

黒島はさらりと言つてのけたが、福留第一部長や富永作戦課長の方針をよく知っている宇垣は、とても樂觀は出来なかつた。

「とはいっても、相手は極めて強硬だぞ」

「わかっています。たとえ力づくでも、承認をとりつけてきますよ」

黒島は何か期するところがあるらしく、自信をこめて言い放った。

〈5〉

草鹿龍之介参謀長は十月五日の朝、当時第一航空艦隊の旗艦だった空母の加賀に戻った。

加賀は同じ第一戦隊の赤城や、第二戦隊の飛龍、蒼龍と共に、この日は大隅半島の東岸の志布志湾に錨をおろしていた。

三万八千トンのこの巨大空母は、赤城と並んで帝国海軍最大の正規空母である。昭和十年の大改装の後は、搭載機数は七〇機を超えているが、飛行機は現在、訓練のため陸上基地へ移っていて、艦内の広い三段の格納庫はガラ空洞だった。

それでも時折、鈍い金属音やリベットの音が響いてくるのは、残された故障機の修理が続けられているためだった。

長官居室では、南雲司令長官が草鹿の帰艦を待ち受けていた。

「長官、只今戻りました」

「おお、ご苦労だった。早速だが結果を聞かせてくれ」

南雲はソファアから身を乗り出すようにして問いかけた。

向かい合つて座つた草鹿は、一呼吸おいてからゆつくりと口を切った。

「結論から申します。残念ながら当方の申し出を、山本長官は拒否されました」

「うむ……。そうか」

南雲の顔面には、ありありと失望の色が浮かんだ。

「それで、山本さんは何と言われたかね」

南雲に促されて、草鹿は陸奥作戦室での会合の模様を、詳しく説明した。

聞き終えた南雲は、腕を組んで嘆息した。
「そうだったのか。君と大西君の二人が、それほど説得しても、効果がなかったとはなあ」

猛将として知られ、気性の激しさがそのいかつい顔面に刻みこまれていた南雲だが、その裏には、小心で優柔不断な一面の隠れているのを、草鹿はよく知っている。

いま想いに沈んでいる上司は、草鹿の目には、落胆した孤独な老人の姿として映っていた。

「長官、もしこれ以上反対すれば、進退問題に発展しかねません」

草鹿はやや声を低めて言った。

「わかっている。私はこの件を君に一任した。その君が、これからは反対しませんと協力を誓ったんだ。何ともいたしかたあるまい」

南雲はそう言いながらも、まだどこか思い切れない様子だった。

そのまま沈黙が続く、やがて南雲が語り出した。

「つまるるところは、山本さんがGF長官に納まったのが間違いないんだ。これは本来あり得ない人事だ・大体あの人は、ほとんど海上勤務をやっていない。軍令部勤務も艦隊司令官も

経験したことがない。つまり海上戦闘に関しては、ズブの素人だよ。一貫して軍政畑を歩いて、航空本部長の時に米内さんの下の海軍次官に移った。それが事の始まりだ」

南雲は草鹿の反応は気にかげず、ほとんどひとり言のように続けている。

「日独伊三国同盟に真正面から反対した時には、右翼に命をつけ狙われた。だから米内さんが辞めたあと、海相に就任して当然なのを、同期の吉田さんがあとを引き継ぎ、山本さんはGF長官に親補されたんだ。当時は、一番安全な場所に移動したと噂されていたよ」

やはり山本長官の批判だと思いつつ、草鹿は耳を傾けていた。

「あれからもう二年過ぎた。これまでのGF長官の任期は、永くて二年が慣例だが、いまのところGF長官交代の話は出ていない。なぜだと思っつかね」

南雲は問いかけた。

「そうですね。山本長官の次の職務となると、やはり海軍大臣でしょう。しかしこれにはいろいろと問題があります」

草鹿が言うと、南雲はうなずいた。

「そうだ。海相になれば、これまでの言動からして、開戦に反対するのは目に見えている。陸軍にすれば極めて扱いにくいし、海軍部内の主戦論者にとっても好ましくない。だから

この件は、目の目を見ないんだ」

「それとも一つ、GF長官としての人望が高く、あとに坐る人物が見当たらないこともありませう」

草鹿の指摘を、南雲は否定しなかった。

「それもあるだろう。だからこんな戦理を無視した八方破れの攻撃案がまかり通るわけだ。いくら我われが理詰めで説得しても、あの人が開き直れば、それでももうどうしようもないんだ」

「しかし長官、戦はやって見なければわかりません。身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれと、言うではありませんか」

草鹿がとりなすように言ったが、南雲はなかなか納得しない。

「君は楽観論者だな。うらやましいよ。しかし私は立場が違う。事の成否はすべて、私一人の肩にかかっている。だからこんな大バクチを打てといわれても、そう簡単には踏み出せないんだ」

南雲の心中は、なおゆれ動いている様子だった。

「わかりました。たしかに長官のおっしゃるのは正論で、決して間違っていないと思います。しかしながら事ここに及んでは、他に方法はありません。大体、米、英両国を相手に戦うこと自体が無茶な話です。五・五・三の協定比率からすれば、一〇対三の戦力比で、とても計算が成り立ちませぬ。そ

れをあえて強行するとなれば、たとえ異端の戦略であろうと、運を天にまかせて断行すべきです」

草鹿は声を励まして、決断を迫った。

「うむ、わかった。こうなればやるしかあるまい。現場のことは、私にはよくわからん。君たちに任すから、よろしく頼む」

南雲は立ち上がって、両手を差し出した。

「大丈夫です。必ず成功させてご覧に入れます」

対面する上司の手を強く握り返して、草鹿は言い切った。

加賀の参謀長室へ戻ると、草鹿はすぐに、首席参謀の大石中佐と航空甲参謀の源田中佐を呼び寄せた。

部屋に入ってくるなり、まず大石が尋ねた。

「参謀長、GF司令部はどうでしたか」

草鹿は、まあ坐れと二人をデスクの前の椅子に掛けさせて言った。

「俺と大石さんの二人で山本長官を説得したが、まったく通用しなかった。結局、全面的に協力しますと約束させられたよ。ウチの長官には、つい先ほど報告したところだ」

草鹿は率直に告げた。

「そうですか。いよいよ決行ですな」

大石の言葉に続き、源田が訊ねた。

「それで使用する空母は、六隻ですか、四隻ですか」

「さあそこだよ。軍令部はハワイへ四隻、南方へ二隻と振りわける気にいる」

「いや、それはダメです。本格的にハワイを叩くのであれば、六隻全部が絶対に必要です」

源田は強く言い張った。

「もちろんG F司令部はそのつもりらしい。だから軍令部との折衝が焦点だな」

草鹿は言いながら、軍令部の福留部長や富永課長の、テコでも動きそうにない顔つきを思い浮かべていた。

「ところで、準備の方はどうだ」

草鹿は二人に問いかけた。

「艦船の燃料補給は、一応のメドが立ちました」

大石が答える。

「北方航路の気象状況が、かりに最悪であっても、航行しながらの補給は可能です。これは曳航の際に補給する側の位置関係を改善したのが、功を奏しました」

「そうか。それから各艦の空いた部分に、重油のドラム缶を積めるだけ積むことだな」

「むろん、その予定です」

草鹿はそれから源田に尋ねた。

「例の浅沈度魚雷の件はどうだ」

源田は軽くうなずいて答えた。

「何しろ真珠湾の水深は、わずか十二メートルですから苦労しますよ。投下方法の改善は、ほぼ限界まできています。速度を失速の寸前までしぼり、高度七メートル、四・五度上向きで発射します。まあ発射というよりは、魚雷をそつと海面に置くような具合です。一步間違えば、プロペラが海面を叩きますから、これは相当な技術が必要ですよ。もしもこんな時に敵艦から機銃掃射を受けたら、ひとたまりもありませんよ」

源田は淡々と説明している。

「魚雷そのものの改良は……」

「発射して着水するまでの、空中の安定性が一番の問題でした。それで航空廠の片岡中佐が、水平保持用のジャイロを取り付け、胴体両側の木製の安定舵を操作して、空中姿勢を保持する。また安定舵は着水と同時にバラバラに飛び散る方法を考案しました」

「うむ、それは聞いている」

「この安定器付きの改造魚雷は、試作の完成にあと三週間ほどかかります」

源田はそうように告げた。

「そうか。こうなるとまず時間との競走だな」

草鹿はそう言いながら、これが成功すれば、真珠湾の航空雷撃は不可能だと信じている米軍は、さぞ驚くだろうと思っ

た。

「ところでどうだ。ハワイの奇襲は成立すると思うか」

参謀長に尋ねられて二人は顔を見合わせ、まず大石が答えた。

「もし六〇〇哩の洋上哨戒を行っていたならば、当然、前日の午後に見えられます。図上演習では、無線通報前にこれを撃墜していますが、まことに虫のいい想定で、実際には相手は我が方の全容を把握すると見るべきです」

「では、奇襲は成立しないわけだ。それであとはどうなるか予想するかね」

「当日、米太平洋艦隊の大部分が在泊中であれば、全力を挙げて激撃に出動するのではないでしょうか」

「しかしその時点では、まだ宣戦布告はなされていないぞ」

「いや、これだけの艦隊が接近してくれば、当然、敵対行動と見なされます。一応、退去せよ位の警告は出しても、両軍の接触でもって自動的に戦争状態に入ると思います」

「つまりハワイ北方海域における艦隊決戦が展開されるわけだ。ではこれに対する我が方の方策は」

参謀長の問いに、大石はニヤリと笑って答えた。

「そのあたりもう、臨機応変というしかありません」

たしかに奇襲攻撃の立案、整備でさえも、間に合うかどうかの有様である。とてもそれ以外の検討には、手が廻らない

状況だった。

「参謀長、私は奇襲成功の可能性が高いと考えています」

今度は源田が意見を述べた。

「北方航路で他国船と行き合い、全容が暴露されれば別ですが、そうでない限り、被発見の可能性は低いと見るべきです」

「では洋上哨戒はないというのか」

「そうです。少なくとも北方海域の哨戒は行われていないでしょう」

源田は自信をこめて述べて、さらに続けた。

「今回の山本長官の発想は、我われにしても奇想天外というしかありません。まして米軍からすれば、ほとんど有り得ない事態です。ですから西方や南方はともかく、北方、東方に対する索敵は、実施されていない確率が高いと考えます」

源田はほとんど一気に述べ立てた。

「つまり、我われがこんな意図や能力を持っているとは、敵サンは夢にも思っていないわけだ」

「その通りです」

「であれば、マサに思う壺だな。ひよつとすると、浅沈度魚雷の開発状況が、開戦の時期を左右するかも知れんぞ」

草鹿の言葉に、大石と源田はそれぞれにうなずいていた。

二日後の十月七日午後、空母加賀に第一航空艦隊の各司令

官、幕僚、艦長、飛行隊長たちが集合した。

さほど広くない作戦室は、人で溢れている。

奥の壁側の椅子に、南雲司令長官が腰をおろし、その傍らに参謀長の草鹿が立っていた。

「では、これから長官が、極めて重要なお話をされる。よく聞くように」

草鹿が一同に告げると、南雲は立ち上がって、ゆつくりと語り出した。

「諸子も承知の通り、我が国と米、英西国の関係は次第に悪化し、もはや開戦は避け難い状況となっている。ここにおいて我が第一航空艦隊を基幹とする機動部隊は、開戦劈頭、ハワイの米太平洋艦隊を奇襲し、これを撃滅することに決定した。詳細はこれから参謀長が説明するが、本職は諸子の勇戦力闘を、衷心より期待するものである」

南雲は、やや硬い表情で宣言した。

一瞬、室内はどよめいた。ごく一部には伝えられていたが、参加者のほとんどは、初めて耳にする作戦計画だった。

すかさず草鹿が口を開いた。

「皆、驚いたことと思う。何しろこれは海戦史にも前例のない、一大遠征計画だ。前途の多難は言を待たない。しかしながらすでに命令は下っている。我われはただ身命を擲って邁進するのみだ。古語にも言うように、『断じて行えば、鬼

神もこれを避く』だな」

草鹿の声は朗々と室内に響き渡った。一同は姿勢を正し、肅然と聞き入っている。

草鹿はここで少し言葉を和らげ、作戦計画の内容、艦隊の編成や選定された航路、航空攻撃の具体的方法……などを語り始めた。

概略の説明が終わると草鹿は、本日はこれまでとするが、詳細な研究や検討は、各部署で実施すると告げ、集合は解散となった。

一同が次々と退去する中、源田中佐は同期生の赤城飛行隊長、淵田美津雄中佐に声をかけた。

「おいフチ、ちよつと俺の部屋へ寄ってくれ」

自分の参謀居室へ入ると、源田は早速切り出した。

「どうだ。いまの発表は」

「ああ、まああんなところやろう。しかし参謀長は、なかなか気合いが入っていたな」

やや面長で鼻下に小さな口髭を蓄えた淵田は、関西弁の残るゆつたりした口調で言った。

一年前に、空母赤城の飛行隊長を勤め上げ、第三航空戦隊の参謀に転任したのに、今年の八月二十六日、再び赤城の飛行隊長として呼び戻された。

当時、赤城にはすでに制空の板谷少佐、雷撃の村田大尉の

二人の飛行隊長がいた。どうして三人目が必要なのかと不思議だったが、その疑問は、着任して見て解けた。

正規空母の集中配備が順調に運用されると、数百機の艦載機集団を統一指揮する、中佐クラスのリーダーが必要となってきた。その総飛行隊長役に、渕田が任命されたのである。

着任して一ヶ月足らずの九月下旬、鹿児島基地で飛行訓練中の渕田のところへ源田中佐がやってきた。そして貴様だけに打ち明けるんだがと前置きして、ハワイ航空攻撃の総指揮を依頼したのであった。

同期生で同じ航空畑を歩く、いわばツーカーの仲である。だから計画と実行の二人の緊密な連携が、この作戦計画を推進する基軸になっていたのである。

「今日の様子だと、ウチの長官もいよいよ肚を決めたわけやな」

渕田が言う。

「そうなんだ。十月三日に参謀長がGF司令部へ行って、反対論をブツたんだが、逆に説得されて戻ってきた」

「そうやろう。山本長官はこうと決めたら、絶対にあとへは引かんよ」

渕田はカラツとした口調で言った。

底抜けに明るく人情味豊かで、抜群の統率力を持つ彼は、一航艦のパイロットたちの信望を一身に集めていた。

「そこで問題は例の浅沈度魚雷だ。今月末に試作品が出来るが、実用に漕ぎつけるのがいつのことかわからない。もしも実戦に間に合わなかつたらどうする」

「そうやな。これまで通りにやるしかなかるう」

渕田は無造作に答えた。

「現在手持ちの魚雷の命中率は」

「予定では、第一次攻撃隊だけが雷撃で、機数は四〇機。超低空をよたよた飛ぶので、まあ1-3は撃墜されるやろう。

残りも投下した1-2は海底につき刺さり、命中可能はせいぜい四〇本のうち十三、四本くらいやな」

「戦艦を沈めるには命中魚雷六本以上が必要だ。そうなるると三隻の空母を狙うしかないな」

「そういうことやな」

渕田は答えたあと、少し考えて言った。

「山本長官はな、真珠湾内の雷撃を初めからあきらめておると違うか」

「とうとうと」

「水平爆撃は命中率八%以下や、急降下は戦艦にはほとんど効果がない。だから戦艦は除外して、空母さえ潰せばそれでいいというのが、長官の本音やないかな」

「うーむ、改造魚雷が間に合わなきや、結局そういうことになる」

源田は腕を組んだ。

「とにかく攻撃の第一目標は、空母と指定されておる」

源田はそう言つて、さらに続けた。

「この作戦は今年一月頃に着想されたというが、その時には真珠湾に正規空母が四隻いた。山本長官は、これを沈めてしまえば残りは大西洋艦隊のヨークタウン一隻だけになる。建造中の新空母の就役は二年先や、その間の太平洋上の制空海権が確保されると計算されたのやろ。あいにく四月にホーネツトが大西洋に廻されて、空母はレキシントン、サラトガ、エンタープライズの三隻になった。だが、それでも開戦と同時に、この三隻を撃沈してしまえば、以後の戦局は絶対に有利という判断やと俺は思う」

源田の意見は、まことにもつともだった。

「たしかにお前の言う通りだ。これまで航空万能、戦艦無用論を説き廻っていた俺が、戦艦を沈めるのに躍起になっているんだからな。まずはお笑い種だ」

二人は顔を見合せて笑つた。

「しかし出来ることなら、洋上へ引っぱり出してから沈めたいな。そうすりゃ引き揚げも修理も出来ん。何よりも鴨打ちの鴨みたいな、情けない低速雷撃をやらずに済む」

源田が言うと源田も同調した。

「どうだろう。攻撃の二、三日前に派手に電波を発して、北

方へ注意を向けさせるといふのは」

「いや、それはムリやな。ウチの長官に、そんな度胸があるわけがない」

源田は二べもなく否定した。

「まあな、せめて参謀長が、もう少し話がわかると面白いんだがなあ。仕方がない。そのあたりは敵サンの哨戒能力に期待するとしよう」

もしも早期に見えられ、洋上の遭遇戦が展開されたら、果たしてどうなるかというのが、軍令部や一航艦首脳部が最も危惧しているところである。だが、空母機動部隊の画期的な威力を知り尽くしている二人は、そのような局面に対しても、なみなみならぬ自信と成算を抱いている様子だった。

〈未完〉

